

葉山嘉樹宛小林多喜二島木健作未発表書簡

浦 西 和 彦

すれ、決して、ちつとも、不真面目でないことを認めて頂きたいと思ひます。

一

消印日付、昭和四年一月十五日

宛名、 東京市外杉並町高円寺 文芸戦線社気付 葉山嘉樹様

差出人、 小樽市若竹町十八 郷利基

傍点は原文のまま

葉 山 嘉 樹 様

小 林 多 喜 二

「郷利基」といふのは、私の時々使ふペンネームです。私は御存知か、どうか知りませんが、「戦旗」十一、十二月号に、「一九二八年三月十五日」を發表したことがあるものです。あの「海上生活者新聞」は、本当に、海員に配るものなので、特にあゝいふ調子で書いたものです。且つての左翼が犯したやうな誤りは、もう改めなければならぬ。あの調子で書いても、海員に直接にアップीलこそ

今、不幸にして、お互に、政治上の立場を異にしてゐますが、——貴方がマキシム・ゴールキーによって洗禮を受けたと同じやうに、私は、貴方の優れた作品によって、「胸」から、生き返つたと云つていふのです。理論上のもは別として。他の機会でも、こつちの新聞に御紹介をしたこともあり、数度、数十回も読み返へし、会ふ人、会ふ同志に、私は貴方の作品をすゝめて来ました。云ふならば、私を本當に育てゝくれた作品は「戦旗」の人達のどの作品でもなくて、実に貴方の作品、及平林たい子氏の二、三の作品でした。殊に、今、「海上生活者」に対して、責任をもつて、「読め！ お前達はこの本だけは読まなければならぬのだ！」と、薦め得るものは、公平に云つて、戦旗の作品には一つも無いと云つて、いふのです。公然とさう云へるのです。貴方の作品を欠いて、日本中一作もないやうです。

「戦旗」に属してゐても、私は、プロレタリア作品のインテリゲンチヤ化されやうとする傾向に、徹底的に抗争するものです。「戦旗」は、然し、この方向に気がいいゐます。そして、私は及ばず乍ら、実際の作品を持って、立派な成績を示して行きたいと考へてゐます。その意味だけでも、私にとって、貴方の作品は、外国のどの作家よりも、多くの教ぶべきものを与へてゐてくれます。

私は今後とも、あらゆる私と接する人に、「新選葉山嘉樹集」をすゝめることを、やめない積りです。

私の「一九二八年三月十五日」、若し貴方の眼に触れましたら、御一読下されば、この上なく幸甚と思ひます。貴方の「プロレタリア」の鼻は、その中からも、「非プロレタリア的」なものを嗅ぎ出すことでせう。御教示願ひます。キツト、努力する覚悟です。

平林たい子氏の作品、——「秋風」「荷車」「施療室にて」など、私は非常な感激をもつて読んだものであることを、何時か、お会ひの節、お伝ひ下さることをお願ひ致します。「創作月刊」の正月号では、平林たい子氏が推奨する新人の中で、私の名を挙げてゐて下さいました。私としては、この上なく、いやかへって、恐ろしくさへなるほど、嬉しいものでした。まだ、御便りする機会を持つてゐません、——さういふ事など、御話し下さることを望んでゐます。

たゞ、最近のものに就いては、政治上のハッキリした分岐があり、（生意気にも）私としても、色々貴方及平林たい子氏の作品につき、対立点が出来たことを、非常に不幸に思つてゐるのです。然し、こ

のことでは、今更らしく云ふこともないと思ひ、御自愛を祈つて居ります。

最後に、ずうと昔一寸面識のあつた前田河氏、及私の作品について、賞めて下さつた里村欣三氏、青木壮一郎氏などに、よろしく御伝ひ下さい。

では、又

二一

消印日付、切手がはがれているため不詳。

宛名、長野県上伊那郡赤穂村 葉山嘉樹様

差出人、東京市本郷区帝大赤門前島崎書院内 島木健作

日付、封筒裏に「二十七日」とある。但し年月の明記なし。

前略。お手紙をいたゞいて昨日から今日にかけ、私は子供のやうによろこんで居ります。逢ふ人ごとに語り、わらはれるかも知れないほどに子供らしさをむきだしにしてゐる次第ですが、このよろこびを私はおさへることができません。今までわづかばかりの小説みたいなものを発表し、ほめられたこともありましたが、処女作発表のときは別として、こんど御手紙をいたゞいたほどうれしかったことはありません。まだ、小説を書いて一年にしかありませんが、今まで書いたものが余り、インテリ臭味が強く、（読んでいたゞかなかつたことが幸であるとおもつて居ります）自分でも少しいや気がさ

し、又プロレタリア文学の道からも多少はづれてゐるとおもひましたので、そういふところから抜け出やうとし今まで主観的心境的なものばかり書いてゐました私には不得意な題材ながら、どうにかあの作品を書いた次第でしたが、自信は余りなく、不安でありました。さういふつもりで書きましたものだけに、ほかの誰でもない、じつにあなたに多少でも認めていたゞいたといふことが私にはじつにじつに力強くうれしかったのであります。労働者作家として誰よりも鋭いあなたの眼に合格したかとおもへば私ははや、何人のどんな批評の前にも頭をしゃんとたてて、立つことの出来る気持です。理窟だけをならべる批評家はおそれるに足りませんが、ほんとの鋭い眼はいつはることが出来ませんのでこはいのです。私のこの喜びといふものは、ものを書きはじめていくらもたゞない、真面目な人間に共通のよろこびであると思ひます。つゝしんで、心からお礼を申しあげます。

私は監獄から出て来ましたが、からだが弱いので何も出来ず、なんとか、しかし進歩的な仕事をつゞけて行きたいとおもひ、文学に來ましたが、文学上の友人もなく、旧作同の諸君もほとんど知らず、手ぎぐりで今までやつて参りました。あなたの作品を、私はおそろく一つ残さず読んでゐるとおもつてゐますが、しばらく休んでをられたところのごろ又さかんに書かれるので、うれしくてなりません。「断崖の下の宿屋」のごとき他の何人も絶対に書くを得ない、あらたまのごとく美しい作品を、時々は見せて我々の渴望を医していただきたくと存じます。「山村に住みて」の生活のなから、あなたにとって、おそらく後期を劃す、一連の傑作が生れるのであらうと、私たちは思つてゐます。いかなることがあつても、絶対に筆

はお捨てにならぬやう（失礼ないひ分ですが、）多くの読者と共にもおねがひしたい気持です。旧文戦の諸作家がほとんど揃つて筆を捨てたので、かういふ言はでものことを申しあげる気持にもなりました。

厳寒の折柄何卒御自愛專一に。

取りあへず、御礼まで。

草々。

二十七日、

葉山嘉樹様

島木健作、

ここに紹介した葉山嘉樹宛の、小林多喜二、島木健作の二通の書簡は、長野県西筑摩郡山口村の葉山菊枝が所持しているもので、まだどの全集にも収録されていない未発表のものである。

志賀直哉の強い影響の下にあつた小林多喜二が、葉山嘉樹の作品を読んで、どれほど激甚な衝撃を受けたかについては、小林多喜二の一九二六年九月十四日、十九日の「日記」や、「葉山嘉樹」（『新潮』昭和五年新年号）などで、すでに有名な話である。ここに紹介した小林多喜二の書簡はそういうことだけでなく、「且つての左翼が犯したやうな誤りは、もう改めなければならぬ。」「『戦旗』に属してゐても、私は、プロレタリア作品のインテリゲンチヤ化されやうとする傾向に、徹底的に抗争するものです。」「私は及ばず乍ら、実際の作品を持って、立派な成績を示して行きたいと考へてゐます。」「などの記述は興味深いものがある。

書簡にある『海上生活者新聞』については、手塚英孝が『小林多喜二』（昭和三十三年二月十五日刊、筑摩書房）の中で、次のように書いている。

「蟹工船」を執筆中の十一月末、彼は風間六三にたのまれて、北方海上員倶楽部から発行を計画されていた『海上生活者新聞』の文芸欄をうけもつことになった。稲穂町東五丁目にあるこの倶楽部は、その年の一月、総同盟系海員組合の刷新派組織のために創立されたものであったが、三月十五日の弾圧いごは、労働者クラブと消費組合をかねた海員の休息所になって、沖売業者の上野彦右衛門が経営者であった。

編集会議は、稲穂町の木下卯八の家でひらかれていた。笹谷金吾が主筆になり、風間が記者、小林が文芸部、経営を木下がうけもって、二九年一月五日、第一号を発行した。半截二ページの新聞で、部数は二千であった。（P104）

この北方海上員倶楽部発行の『海上生活者新聞』は、昭和四年三月二十二日発行の第三号をもって中断されたが、小林多喜二は「郷里基」のペンネームで、第一号には「海員は何を読まねばならないか」、第二号「葉山嘉樹『海に生くる人々』の紹介」、第三号「寄らば切るぞ」を執筆掲載したのである。しかし、二月発行したという二号所載の「海に生くる人々」を紹介した文章は、いまだ発見されていない、全集にも収録されていないのである。

「あの調子で書いても、海員に直接にアッピールこそすれ、決して、ちっとも、不真面でないことを認めて頂きたいと思ひます。」は、海上労働者に改造社発行の『新選葉山嘉樹』を推賞した「海員は何を読まねばならないか」（『海上生活者新聞』第一号昭和四年

一月五日刊）をさし示すものと思われる。私が「葉山嘉樹著作年譜」作製の時、葉山菊枝に見せていた「切り抜き」の中に、それと関連して、葉山嘉樹が昭和四年一月九日に執筆した「郷里基（ゴリーキー）氏へ」の一文がある。『海上生活者新聞』第二号か、あるいは北海道の商業新聞に掲載されたと推測されるのであるが、掲載新聞名、発表年月日は不詳であるが、以下それを紹介しておく。（ルビ省略）

* * *

郷里基（ゴリーキー）氏へ

葉山嘉樹

マキシム、ゴリーキーは私の最も尊敬する作家です。

私の海上生活の絶えざる生命の危難の前に、マキシム、ゴリーキーは、慰藉と激励と反抗とを植つけてくれた。

私は船長にも、チーメーツにも、船主にも閉古垂れはしなかった。何故かならば、ゴリーキーが絶えず私に叫びかけてくれたからだ。

「閉古垂れるなノ強くなれノお前たち労働者こそ、総ての人間の育ての親だノお前たち、いや、俺たち労働者が居なくて地上に生命があると思ふかノ卑屈になるなノ強くなれノ挽ねかへせノ」

ゴリーキーはどんな風の日でも、時化の日でも私を鞭撻してくれた。

私はゴリーキーに従って生きた。

ゴリーキーが、曾て、余り「生きる事の苦惨さに」愛想を尽して、

その肺臓をピストルで打ち抜いたことがあったやうに、私もゴリーキーを知る前までは、ひどいナラズ者であった。そして「死んだ方がいゝ」と字義通りに幾度考へたか知れなかった。

だが、ゴリーキーが一度自殺の危難を突破してから強くなったやうに、私もゴリーキーに洗礼をうけてから強くなった。

強くなつてしまつたのではない。負る事の方が多い。だが「負て堪まるか」と云ふ根性が、彼によつて植えつけられた。

今だつて支配階級に私たちはおさへつけられてゐる。出鱈目にしぼられてゐる。「だが、負て堪まるか」

私は被搾取階級のために、「負て堪まるか」を、絶えず宣伝する任務を感じる。それは私自身が属してゐる階級のために

仲間たちが、こんな篋棒べらぼうな状態にゐる事が、疝癩にさはつて堪まらないがために

殊に、私は海上労働者のために叫びたい。何故かならば海上労働者は陸上に於て多くの発言の機会を持たない。その海上労働者の待遇は、その労働に比較して「なつてゐない」のだ。

私は叫び続ける

諸君も叫んで欲しい。

海上に於ける一切の汽船のホイッスルが一度にわめくやうに、われ等海上労働者の総ての成員が、われ等の生存権を要求する叫喚を一時に上げた時に、われ等がどんなに大きな「力」を持つてゐたかを知るであらう。

泣いてもいゝ。だが泣き寝入りするな

喚け、喚きくたびれるな

われ等が真実の生活を獲得するまで。

私は曾て私がマドロスであつた時、私に力を与へてくれたゴリーキーと、字こそ違ふが同じ発音の、郷利基氏が私の「海に生くる人々」(新選葉山嘉樹集中採録)を推賞して呉れた事を此の上もなく嬉しく思ふ。

世界中の文壇人が褒めてくれるよりも、仲間の一人が褒めてくれるのが、どの位あり難い事であるか。若し、仲間の一人でなく、十人、千人、万人が誦んでくれるならば、私は自分の仕事に自信を持つ事が出来る。そして私はどんな苦惨な生活をも乗りきつて難破するまで、被搾取階級の苦難な人世を航海するであらう。

だが、私一人では駄目だ。諸君と共に
何故？今さら誰が私を船に雇はう？

諸君の鞭韃に従つて勿論私は航く。

だが、諸君に、より強い、より鋭い、「海に生くる人々」となつて、上陸し、示威し目的を達成せられん事を、切望に堪えない。

如何なる黎明も、海より早く来る処はない

海こそ最も早く「明るく」ならねばならない

一九二九、一、九

* * *

島木健作の葉山嘉樹宛書簡は、注で記したように投函年月が不詳である。高橋春雄の「島木健作年譜」(日本現代文学全集80『武田麟太郎・島木健作集』・昭和三十八年十月十九日発行・講談社)によると、島木健作は昭和十年五月に相沢京と結婚し、十六日に世田谷区世田谷二丁目二〇二四に移転している。それ以前は昭和七年三月に大阪刑務所を仮釈放になつてから、島木健作は実兄の経営して

いた本郷赤門停留所前の島崎書院に寄寓していた。書簡の差出し住所が「東京市本郷区帝大赤門前島崎書院内」になっているので、昭和十年五月以前に投函したことになる。「小説を書いて一年にしかありませんが」という記述があるので、島木健作が処女作「癩」を書きあげたのが昭和九年の正月で、森山啓、徳永直の推薦によって『文学評論』に掲載されたのが昭和九年四月号であるし、またこの書簡に出てくる「断崖の下の宿屋」は「改造」の昭和十年一月号に「山村に住みて」は同年二月号の『文学評論』に掲載されたものであるから、島木健作の書簡は昭和十一年一月頃と断定してさしつかえがないと思われる。「今まで主観的なものばかり書いてみました私には不得意な題材ながら、どうかあの作品を書いた次第でした」という「あの作品」とは、昭和十年二月号の『改造』に掲載された「黎明」をさすものと思う。（高橋春雄の「島木健作作品年表」へ）『現代文学序説』三号・昭和三十九年九月・南雲堂桜楓社で明らかのように、島木健作は昭和九年十二月号、昭和十年一月号、三月号、四月号には小説は発表していないで「黎明」以外の作品は考えられない。）では一体、葉山嘉樹が「黎明」のどこに共感したのかということであるが、葉山嘉樹が『帝国大学新聞』の「遮断機」欄で書いた次の文章を挙げておきたい。（ルビ略）

* * *

『喚き続けて』……

島木健作「黎明」（改造）

葉山嘉樹

島木健作氏の「黎明」は、私を鼓舞し、鞭撻した。与へられた枚数が二枚であるから、詳しく感想を書いてる訳には行かない。題材は東北地方の農民組合と、貧農の不当に虐げられる物語を取り扱ったものである。

序を追って描写され、作意は段々と高調され、最後に到って、読者は感激の頂点まで連れて来てゐられた事に気付く。

——苦しい息の下から彼は喚き続けてゐた。——で、この作は文章の限りでは終つてゐる。だが、この作の生命は終つてゐない。のみならず、そこから始まつてゐるのである。「喚き続けて」ゐるのである。

読者は、も一度読み返さねばならない、何故かならば、この作の終末から始まる処の物語りを、読者は冒頭から終末までの行文の間から発見しなければならぬからだ。そしてそれは見事に暗示されてゐる。

こういふ作品は、作品が佳作である、とか傑作であるとかいふ所謂文芸批評の埒を踏み越えて、静かに大衆の間に姿を消すものである。そして、そこで確りした根を据えるのである。批評家や恐らくは作家自信さへもが忘れた時に、この作品は、壮年期に入つてそれ自体の活動を始めるのである。

プロレタリア文学の作家には、かういった風な一面がある。これは大衆文学や、通俗小説など、まる切り違った一つの面である。

私は島木氏の作を、この外幾つも読んでゐる。そしてその多くがどうであらうともいふ。「黎明」はまぐれ当りの作ではない。

そして「黎明」を生む程の作家は、作品よりも高度に成長してゐると思ふ。時事日に非なる時、島木氏の現れた事は、プロレタリア文

学の上における大いなる喜である。
氏の健筆を析るものである。

* * *

附記

「『喚き続けて』……」の掲載年月日については、国立国会図書館所蔵の『帝国大学新聞』（その該当すると思われる月のもの）が、破損のために閲覧できず、未調査である。ご存知の方は一報下されば幸である。